



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	インターネット上で見知らぬ他者と交流する子どもの経験とジェンダーの権力構造による周縁化
Author(s)	佐藤, 奈月
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第16802号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16802
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99647
Type	doctoral thesis
File Information	SATO_Natsuki_abstract.pdf, 論文内容の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

氏名：佐藤 奈月

学位論文題名

インターネット上で見知らぬ他者と交流する子どもの経験と
ジェンダーの権力構造による周縁化

本博士論文は、子どものネットを通じた見知らぬ他者との交流（以下、ネット交流）をテーマとし、子ども、特に女子が経験する、年齢（子どもであること）とジェンダー（女性であること）の複合的な抑圧を検討するものである。

第1部では、文献レビュー（研究1）に基づき課題を設定した。国内の先行研究は、①そのリスクの高さから、②特に女子の行動を問題視してきたが、保護は反発を生む・大人への隠蔽を誘発する可能性があり、③実際は身近なコミュニティの同年代と知り合うことが多いにもかかわらず、そうした経験を含む当事者の意味づけはあまり検討されてこなかった。一方で、海外の研究では、ネット上での子どもの被害を「性暴力」や「グルーミング」といった加害者の問題として捉える視点や、保護によって子どもの権利が侵害されているという視点も提示されていた。

これを踏まえ、本論文が取り組むべき以下3点の課題を設定した。1点目に、ネット交流におけるリスクやリスク回避行動、およびその性差・発達差の実態が十分に検討されてこなかったことである。2点目に、子どもを「保護」しようとする大人のアプローチがもつジェンダーバイアスや、意図に反して行為の隠蔽に繋がるという「保護のパラドックス」の検討が不足していることである。3点目に、これらの「リスクと保護」の言説によって周縁化されてきた女子が、主体的に経験を意味づける「声」の検討が不足していることである。

本論文は、これらの課題に対し、インターセクショナリティとポジショナリティを理論的立場とし、以下3点のリサーチクエスション（以下、RQ）を立てた。RQ1は、「ネット交流におけるリスク経験およびリスク回避行動には、どのような性差・発達差がみられるのか？また、子ども自身が行っているリスク回避行動は実際にリスクを低減させることができているのか？」である。RQ2は、「子ども、特に女子を『保護』しようとする大人のアプローチは、どのようなジェンダーバイアスを含み、どのような『パラドックス』を生み出しているのか？」である。RQ3は「『リスク』と『保護』の言説により周縁化されてきた女子は、ネット交流における他者との親密な関係を、主体としてどのように経験し、意味づけているのか？」である。

本論文は、まずこれら3つのRQの答えを明らかにした上で、「ネット交流における『リスク』と『保護』の言説は、どのような権力構造を不可視化し、誰の、どのような経験を周縁化してきたのか？」という本論文全体を貫く問いに答えることを目的とする。

第2部では、RQ1を検討するために、4つの実証研究（研究2～5）を行った。

研究 2 では、小・中・高校生 3,099 名への自由記述調査から、どのような他者を不審に思うかを検討した。その結果、男子は乱暴な言動の他者、女子は性的なメッセージを送る他者を不審に思うという性差が示唆された。

研究 3 では、高校生 1,129 名への質問紙調査から、高校生がネット上で他者と知り合うきっかけの性差を検討した。その結果、男子は「ゲーム」、女子は同じ高校の者と知り合うことが特徴的であり、女子の知り合う「きっかけ」の中には安全性が高いと考えられるものも含まれていることが示唆された。

研究 4 では、小・中・高校生 3,338 名への質問紙調査から、小・中・高校生が経験しやすいリスクと、そうしたリスクを回避するために行っている行動を検討した。その結果、男子は「悪口・嫌がらせ」や「金銭トラブル」のリスクが高く、女子は「性的メッセージ受信」や「身体写真要求」等のリスクが高かった。また、性別「その他」の者は、広範なリスクに最も晒されやすかった。また、リスク回避行動として、女子は男子よりも「関係選択（ブロック等）」や「アカウント削除」を多く行っていた。

研究 5 では、小中学生 1,371 名を対象とした 2 時点縦断調査から、こうしたリスク回避行動の効果を検討した。その結果、女子が多く行っていた「関係選択」は、半年後のリスク発生確率を有意に高めていた。また、リスク回避行動や環境・個人要因を統制した上で、女子であることそのものが「性的メッセージ受信」のリスク要因であった。これらの結果から、ネット交流のリスクを個人のスキルやリテラシーの問題として捉えることの限界が示唆された。

第 3 部では、RQ2 を検討するために、2 つの実証研究（研究 6～7）を行った。

研究 6 では、小・中・高校教師 600 名への質問紙調査から、「保護」アプローチに潜む教師のジェンダーバイアスを検討した。その結果、教師は実際は男子に多いリスクや性差のないリスクも「女子のリスク」と誤認し、男子より女子のネット交流を強く「拒絶」していた。また、教師の持つ、女性への否定的な偏見（敵意的性差別）は、性被害に遭った生徒への「被害者非難」を強め、女性への肯定的な偏見（好意的性差別）は、「被害の深刻さの軽視」を強めていた。

研究 7 では、小中学生 2,831 名を対象とした質問紙調査から、「家族や先生は自分のネット交流を否定的に思っている」という認知が、ネット交流の隠蔽を促進するという「保護のパラドックス」を検討した。その結果、女子は男子より、「家族や先生は自分のネット交流を否定している」と強く認知していた。さらに、この「否定されている」という認知が強いほど、家族や先生が自らのネット交流を「知らない」と回答する可能性が高かった。これらの結果から、「保護のパラドックス」が実証的に裏付けられた。

第 4 部では、RQ3 を検討するために、1 つの質的研究（研究 8）を行った。

研究 8 では、青年期の女性 8 名へのインタビュー調査から、ネット上で親密な関係が形成されるプロセスやその意味づけを検討した。その結果、彼女たちはリスクへの不安から相手を選び、危険を回避しながら、対面の友人関係が持つ「しがらみ」のない、多様性に開かれた親密な関係を主体的に形成していた。しかし同時に、彼女たちはその「親しさを言い表す言葉がない」と感じたり、社会に流通する「ネット依存」といった否定的な言説を内面化し葛藤したりしている状況が示された。

第 5 部では、RQ1～3 の結果をまとめ、総合考察を行った。

本論文の結論として、ネット交流における「リスク」と「保護」の言説は、「大人一子

ども」および「男性－女性」という二重の権力構造を不可視化し、性別により異なる形で子どもの経験を周縁化していた。具体的には、①「女子」は、性的に搾取されやすいという被害の責任を個人に転嫁され、参加する権利を侵害される、②性別「その他」の子どもは、性別二元論の枠組みからこぼれ落ち、その深刻なリスク経験が不可視化される、③「男子」は、性被害の深刻さを軽視される不利益を被っていた。さらに本研究は、こうしたジェンダーにより周縁化された経験を「認識的不正義」(Fricker, 2007) の議論に位置づけ、女子がネット交流を否定されることを予期し、親密な関係を開示しなくなることで、リスク・機会を含めた経験やそこに潜むジェンダーの権力構造が不可視化されるメカニズムを「ネット交流の構造的沈黙」と命名した。これを踏まえ、豊かな関係性を侵害しうる加害者と、リスクを個人化することで構造を温存させる大人を告発するとともに、保護者、教育現場、事業者・政策立案者、子どもたちへの実践的示唆を提言した。